第十四講《随筆》道について〈選択肢問題〉

道を歩くということとは、いったい、どういうことだろう。碁盤(注)の目のなかに暮らしていたころ、わたしはひとつの道を歩きながら、同時に、その道の裏側に、平行して走る道があることを、知っていた。ひとつの道が、もうひとつの道と、どのようにつながっているのかを、知っていた。自分がいま、歩いている道と、その周囲に展開している風景を、実際にこの目で見定めながら、同時に、見えない裏道の風景を、予測したり、想像することができたのである。よく知る町を歩くとは、こういうことだ。頭のなかに、縮小された町全体が入っていて、そのうえで、目の前にあらわれてくる風景を感受している。

　自分の身体を何十倍にもふくらませたもの、それが、暮らしている町の実感であり、一方でまた、自分が町を構成している、細胞のかけらのひとつであることを、無意識のうちに感じていたと思う。

　慣れない町では、A こうした複合的な散歩ができない。道を歩けば、その道がすべてである。場所という場所は、ばらばらに点在していて、それらがどのようにつながりあっているのかが、見えてこない。現前の細部しか手がかりがなく、関係や全体がわからない状態というのは、どんなものごとを把握する場合にも、不安感をひとにもたらすのではないか。

　知っている道に出たときの、あの不思議にほっとする、あたたかい感じ。わたしたちは、どんなに大人になっても、身体の奥に、迷子になることの恐怖をかかえて生きているのではないだろうか。

　しかしどんな道も、いかなる町も、生きているひとと知り合うのに似て、少しずつ、だんだんと、なじんでくるものだ。町の構造がようやく身体に入ってきたころ、「近道」とか「遠回り」という概念も入ってきた。目印だけを頼りに通っていた道が、案外、遠回りであることがわかったり、思い切って足を踏み入れてみた小路が、思いがけぬところへ抜けていたり。道を歩くことは、こうして全身をかけて、土地を切り開き、土地にもぐりこみ、土地になじんでいく行為にほかならなかった。

　知らない道が、見知らぬ場所へ、ひとを誘うのは当たり前だが、知っている道が、見知らぬ場所にひとを運んだり、知らない場所が、よく知る道に通じていることを知ることには、いつもささやかな感動がある。

　道には、知っていることと知らないことを、結びつける機能が備わってもいるようだ。知っていることを伸ばしていけば、知

らないところへ出る。知らないものを伸ばしていくと、知っている道に出る。

外国に旅に出ると、特に一人旅では、こういうことは、明瞭（めいりょう）に起こる。言葉の不自由さに加えて、土地そのものからはじかれている感じは、ひとを二重に［B］にするが、それでも、ひとつの道が、次第に親しい道になっていき、日々、見知らぬ場所へとひとを運び、再び、宿へとひとを戻すとき、その道はひとにとって、水や塩に等しい、命をつなぐ脈ともなる。そうした道に付けられてある、通りの名前を知ったりすると、道は、いつでも記憶のなかに呼び出せる、親しい友のような表情さえ表す。

初めての道に足を踏み入れるときは、いつも身体に緊張が走るが、すべての道は、二度目に通るときから、「知っている道」になることも面白い。当たり前のことだが、そのことはうれしい。二度目に通るとき、ひとは、今の道と、記憶のなかの道の、二つの道を、同時に歩くのだ。

子供のころ、迷子になったことがある。夏の朝、家の前の道を、ひとりでずんずんと、進んでいった結果、とんでもないところへ出てしまったのであった。

気がついて見回した町並みは、自分のまったく見知らぬ場所である。見知らぬひとが歩いている。見知らぬ自転車がとまっている。自分で勝手に歩いてきただけなのに、自分の帰るべき根元のようなものが、ぷっつんと音をたてて切れてしまったようだった。遠心力のような透明な力によって、理不尽に道端に捨てられたような気がした。わたしは、ひとりだった。あたたかい共同体からはじきだされて。こん棒で胸をつかれたような、激しい悲しみの感情がわいた。わたしは大声をあげて、泣いたのではなかったか。

ここはどこ？　すべての迷子は、まずその疑問に射抜かれている。いつも暮らしている場所にいるとき、わたしは、そんな質問をもったことがなかった。自分が生きている場所を見失う不安、それは自分自身を、見失う不安のことなのかもしれない。ここはどこ？　というひとつの疑問は、わたしはだれ？　という次の疑問を、容易に呼び出しそうな気配を持っている。

しかし、わたしは、自分が迷子になったあのときの、ひりひりとした、異様に新鮮な不安を、大人になった今、時々、味わいたいと思うことがある。見慣れたひと、見慣れた土地、いつもの習慣によって、かたちづくられた日常。それを不意に見失って、道の中央で、茫然（ぼうぜん）としてみたいのだ。C<u>迷子になることを恐れながら、同時に、期待する心</u>がある。その心とは、いったい、なんだろう。どこから生まれてくるのだろうか。繋（つな）がらなければ生きていけないのに、繋がれば、その絆（きずな）を切ってしまいたくなる。

迷子というのは、内的な危機なので、幼児のように泣き声をあげない限り、迷子であるかどうかは、外側にはわからない。そう思って改めて眺めてみると、生きているひとが、わたしも含めて、みんな迷子に見えてくる。

電車に乗っていて、知らない町を通りすぎるとき、知らない道が、一瞬、さっと目の端に入ることがある。いま、走り去る電車から目にしただけで、おそらく一生涯、縁のない道だろう。そこを歩いていく、もうひとりの自分を、想像するのがわたしは好きだ。

このわたしとは、まったく違う人生を持ったわたしが、そこで、生き、暮らしている。――そんな気がして、身体を電車に乗せたまま、心だけを、未知の道に歩かせてみるのだ。

（小池昌代の文章による）

（注）　碁盤の目……碁盤の目のように道が整っていた町

問１　傍線Ａ「こうした複合的な散歩」とは具体的にどのようなことをすることか。その説明として最も適切なものを、次から一つ選べ。

①　知らない道に不安を感じながら、その土地にもぐりこんだりなじんだりしたいと考えること。
②　近道だと思って目印を頼りに歩きながら、実際には案外遠回りをしているのではないかということに気づくこと。
③　慣れない町の知らない道を歩きながら、これからその道がいざなう見知らぬ場所に対してあれこれと思いをめぐらすこと。
④　あえて知らない道を選んで歩きながら、知っている道に出たときの不思議にほっとするあたたかい感じを楽しみにすること。
⑤　いま歩いている道とその周囲の風景を見定めながら、同時に見えない裏道の風景を予測したり想像したりすること。

問２　空欄［Ｂ］にあてはまる最も適切なことばを、次から一つ選べ。

①　傍観者　②　異邦人　③　逃亡者　④　自由人　⑤　越境者

問３　傍線Ｃ「迷子になることを恐れながら、同時に、期待する心」とは、具体的にどのような「心」のことを意味しているか。その説明として最も適切なものを、次から一つ選べ。

①　人との関係を断ち切ってみたいという思いにとらわれつつも、幼時に味わった激しい悲しみの感情を恐れて、連帯を求めようと願う心。

②　現実を否定することを後ろめたく思いつつも、子供のころ感じた漠然としたあこがれをなつかしんで、いつまでも子供のままであり続けたいと思う心。

③　自分が生きる場所と自分自身とを見失うことを恐れつつも、子供のころに味わった新鮮な感覚を思い出して、日常生活を有意義なものに改善しようとする心。

④　あたたかい共同体から疎外されることを危惧（きぐ）しつつも、現実的な生活からしばし離れて、非日常的で新鮮な不安に浸りたいとあこがれる心。

⑤　内的な危機感が他人に気づかれることを不安に思いつつも、時には子供のころのような自己主張も許されると考えて、何とか率直な気持ちを訴えようとする心。

問４　「わたし」が道について考えたことに関する説明として適切なものを、次から**二つ**選べ。

①　「わたし」は整った道の町にいたときには気づかなかったが、慣れない道の町に暮らしてなじんでくると、道には知っていることと知らないことを結びつけるという機能があることを発見して、ささやかな感動を覚えた。

②　「わたし」は子供のころに迷子になったという恐怖から、大人になってからも道の中央にたたずみながら迷子になることを恐れることが多かったが、外国に旅に出たときに命をつなぐ脈となるという道の役割を知って、恐れることはなくなった。

③　「わたし」は人がみな迷子であると感じるようになってから、次第にまったく違う人生を持ったもうひとりの自分を想像する機会が増えて、知らない道を歩くことに恐怖感を覚えるようになった。

④　「わたし」は知っている道を通るときに過去と現在の二つの道を同時に歩くということに興味を持つ一方で、電車に乗っ

て知らない道を目にしたときには、様々な道で様々な生活をする人々に自らを重ねるようになった。

⑤「わたし」は方向感覚が次第に鋭く研ぎ澄まされてきて、目印さえあれば行きたいと思う場所まで難なくたどり着けるようになったが、同時に知らない道を探索することの楽しさを実感した。

第十四講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　小池昌代＝こいけ　まさよ（一九五九〜）東京都生まれ、津田塾大学国際関係学科卒。詩人。今回は早大入試の過去問ですが、この方の「背・背なか・背後」という随筆は東大入試でも出題されています

語句

異邦人＝いほうじん↓外国人。英語ではストレンジャー、フランス語ではエトランゼ。アルベール・カミュの小説作品の題名『異邦人』

傍観者＝ぼうかんしゃ↓当事者として参加せず、傍からみているだけの人

疎外＝そがい↓親密の反対で、つまはじきにすること。同じ発音の「阻害（邪魔するの意）」よりも強く攻撃的な意味

危惧＝きぐ↓成り行きを心配し、恐れること

理不尽＝りふじん↓物事の筋道が立たないこと。道理に合わないこと

復習問題　第十四講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）エン心力がはたらいて安定する　①円　②縁　③園　④延　⑤遠
（イ）理不ジンな要求には屈しない　①人　②陣　③仁　④尽　⑤神
（ウ）迷子の緊チョウ感を思い出す　①張　②跳　③調　④挑　⑤超
（エ）対象を明リョウに認識する　①遼　②療　③寮　④僚　⑤瞭
（オ）両者は容イには識別できない　①易　②居　③異　④衣　⑤意
（カ）迷子は内面、心のキ機である　①気　②危　③飢　④期　⑤鬼
（キ）この出会いは生ガイ忘れない　①害　②慨　③涯　④概　⑤崖
（ク）期タイは失望の母だという　①対　②待　③態　④耐　⑤滞
（ケ）フク合的な機能を果たす事務機器　①腹　②復　③福　④複　⑤服
（コ）電車の中でソウ像をめぐらす　①相　②想　③創　④奏　⑤壮

第十四講《随筆》道について

《本文の対比構造》

主役＝筆者の見解

未知の道

＝見知らぬ場所・見知らぬひと

迷子への期待・異様に新鮮な不安

↕ 対比

比較相手

既知の道

＝複合的な散歩

見慣れたひと・見慣れた土地・日常・

あたたかい共同体・迷子への恐れ

《解説》

問１《傍線部説明》

筆者は「未知の道」（だじゃれじゃありません）重視で、そこで迷子になるトキメキを語っています（かなり変わったひとです）。さて傍線の「複合的な散歩」はその正反対で、すっかり見慣れたなじみきった町でしかできないものです。⑤が正解です。①は「知らない道に不安」が×、③は「慣れない町の知らない道」が×、④は「知らない道」が×です。ことごとく対比混乱の誤りですね。②は未知から既知への過渡期にある散歩です。まだなじみ切っていないからこそ「案外遠回り」ということになってしまうのです。これも対比混乱の誤りと呼んでいいでしょう。

問２《空欄補充》

外国での旅ですから、親しさやなじみの反対です。見知らぬ人、とくに異質性を強調する言葉である②の「異邦人」が正解です。⑤の「越境者」と迷うかもしれませんが、このなじみなさ、異質さを表現する言葉ではないため選びません。その他の選択肢はカスリもしません。ことごとく正しい対比喪失の誤りです。〝傍観者⟷参加者・当事者〟〝逃亡者⟷参入者・残留者〟〝自由人⟷奴隷〟など本文は比べてないよね。こうして反対語を考えるとおかしな選択肢のオカシサが分かります。

問３《傍線部説明》

既知・なじみ・あたたかい共同体重視の視点からすれば（比較相手の視点だよ）、「迷子になることを恐れ」るわけですが、同時に筆者は未知なものへの「期待」、迷子になることへの「期待する心」も重視しているわけです。しかもメインは後者です。①はこの関係が逆転しています。対比混乱の誤りと言えます。②は「いつまでも子供のままであり続けたい」が笑えます。ピーターパンかよ！ネバーランドか（けっして大人にならない国だよ）！本文には「わたしは、自分が迷子になったあのときの、ひりひりとした、異様に新鮮な不安を、大人になった今、時々、味わいたいと思うことがある」とありますが、このことと「子供のままで」とは全く異なります。記述に反する誤りです。③は「日常生活を有意義なものに改善しようとする心」がえらく道徳的ではありますが、×です。なぜなら、迷子への「期待」とは「日常」から離れることだからです。「日常」を「不意に見失っ

て～茫然としてみたい」という衝動です。したがって記述に反すると言ってもいいし、対比混乱の誤りと呼んでもOKです。⑤はまず前半部の「不安」の内容が×です。正しくは「迷子になること」が不安なはずです。それなのに「他人に気づかれること」にすりかわっています。記述に反する誤りです。さらに後半部「自己主張」「率直」が×です。そのようなことができる・できないは比較になっていません。まさしく正しい対比喪失の誤りです。④が正解です。「日常」から離れるのが「迷子」ですから「非日常」と表現してOKです。

問４《全体の主旨説明》

②は「大人になってからも～迷子になることを恐れることが多かった」が×です。むしろ迷子への期待でしたよね。記述に反する誤りとも対比混乱の誤りとも言えます。③の「知らない道を歩くことに恐怖感を覚えるようになった」も迷子への期待と真っ向から反します。記述に反するとも対比混乱とも言えます。⑤は「方向感覚が次第に鋭く研ぎ澄まされてきて」が×です。これじゃ〝方向音痴⟷方向音痴の改善〟という奇妙な対比になってしまいます。もちろん本文の正しい対比喪失の誤りです。シラジラシーと叫びそうです。①と④が本文の内容に合致しています。

模範解答

問１＝⑤　問２＝②　問３＝④　問４＝①・④（順不同）

さて、これで高１高２現代文の全問題が終了しました。やりとげましたね。この早くからのスタートを生かし、次々と発展的学習を進めてください。スタディサプリでは「高３トップ＆ハイレベル現代文（全二十四講）」をご用意いたしております。高３になるまで待たずにどんどん手を出してくださいね。

復習問題　解答　第十四講

（ア）⑤　（イ）④　（ウ）①　（エ）⑤　（オ）①
（カ）②　（キ）③　（ク）②　（ケ）④　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）遠心力　（イ）理不尽　（ウ）緊張　（エ）明瞭　（オ）容易
（カ）危機　（キ）生涯　（ク）期待　（ケ）複合　（コ）想像